

なぜマス・メディアは真実を伝えようとしなののか？

—韓国・利川市の冷凍倉庫爆発事故に思う—

エッセイスト 近藤 節夫

「ご存知だろうか？ 最早旧聞に属する「事件」である。屠蘇気分も覚めやらぬ昨年（二〇〇八年）一月七日韓国ソウル市郊外の陶器の街・利川で近代的な冷凍倉庫が突然爆発炎上して四〇名が即死し、一〇数名が重軽傷を負った大惨事が発生した。国外で起きた事故であり、あれから時間的にも暑い夏を二度までも送って、日本国内ではこの事故を知って記憶に留めている人は少ないのではないかと思っている。

しかし、実のところそこには、災害や事故というよりも、事故の背後に政治的、かつ社会的な事件性を窺わせるような謎を滲ませ、同時にわが国のマス・メディアの存在が鼎の軽重を問われるに足る不審な動きがあったのである。

一、メディアはなぜ「事件」を隠そうとするのか。

この「事件」の報道に私が最初に触れたのは、正に爆発事故が起きた当夜、昨年一月七日の深夜に近い時間帯だった。日本テレビ系列と、時間をおいてもうひとつのテレビ画面（チャンネルは記憶にない）を通して事件を知ることになった。激しく燃え上がる火炎とサイレンをけたたましく鳴らして走り回る消防車、そしてその猛火の中で懸命に消火作業に当たる消防士、その臨場感溢れる画像は、火災現場の地獄図と現場の混乱を恐怖心を織り交ぜながら視聴者に訴えていた。

私は一刻も早く事件の詳細を知ろうと翌朝テレビニュースと朝刊に飛びついた。しかし、その期待？はものの見事に裏切られた。どつしたとか、前夜動画であれだけ派手に報道された大惨事の関連ニュースは、意外にもテレビと朝刊のどこにも見られなかったのである。それどころか、マス・メディアは翌八日以降この間深い「事件」について報道することを一切止めてしまったのである。そして緘口令は今も続いている。

「事件」発生当日、一旦は速報で伝えておきながら、納得できるような説明や理由もなく、突然貝のように頑なに口を閉じ、知り得た情報を国民に知らせることを一方的に止めたのだ。

・マス・メディアは、何故にこれほどの大惨事を国民に伝えようとしなののか。

・「事件」の報道を忌避することでマス・メディアの責任を果たしていると言えるのか。

・彼らはジャーナリズムの責務を一体何と心得ているのか。

わが国のテレビ局、そして「事件」そのものを一行たりとも報道しない新聞界は、手抜きを行い、「事件」の証拠隠滅に加担していると言わざるを得ない。

そこには世間に知られては具合の悪い重大な機密とか、秘密性を帯びた醜聞が隠されていたのではないかと勘ぐらざるを得ない。その背景には、国外で起きた不都合な事故のニュースを隠蔽しようと考えた日本政府関係者と、それに協力したマス・メディアとの間に密約があったのではないかとの憶測さえ呼ぶ可能性がある。一度入手した情報を意図的に国民の目から隠してしまおうとする彼らの真意は一体何だろうか。彼らにとってメシの種である重大な情報を、敢えて隠蔽しようとする行為はまったく理解しがたい。このように傲慢で不誠実な体質のマス・メディアの対応は、はっきりいってジャーナリストとして責任を果たしているとは言いがたい。敢えて言えば、自らの職責放棄に当るのではないか。一体この事件の背後には何があり、何を隠そうとしているのだろうか。気骨のあるジャーナリストなら、進んでその原因を究明して世間に知らせるべきではないか。疑惑はますます深まるばかりである。然るに、その間とも呼べる間は、いよいよよ抜き差しならぬ闇の中へ吸い込まれていっているのである。

私には未だにこの「事件」の真相が掴めない。

二、「事件」の真相とその背後にあるもの

この事件の発生とその後の経緯をもう少し詳しく説明しよう。

「京畿道利川にある冷凍物流倉庫の地下で激しい爆発と同時に火災が発生し、この建物で作業を行っていた作業員五七人のうち四〇人が死亡するという大規模火災が発生した。救助された一七人は自ら脱出し、あるいは救助されて病院で治療を受けているが、七人は重体だ。警察と消防によると一月七日午前一時五〇分ごろ、京畿道利川市戸法面西山里の『コリアニ〇〇〇』冷凍物流倉庫地下一階の機械室で、突然『バーン』という爆発音とともに火災が発生した。火災が発生した当時は倉庫内の地下一階で作業員五七人が、電気の配線工事や冷凍設備の冷触に用いられるフロンガスを注入する作業などを行っていた。利川消防署の関係者は『作業員が冷凍配管を設置しながら電気溶接を行うために火をつけたところ、これが空気中に充満していた気化油に引火して爆発したようだ』（朝鮮日報〇八・

一・八）

「四〇人の人命を奪った利川冷凍倉庫火災惨事は、作業の便宜のために消火設備の作動を人為的に遮断したことが惨たらしい事態の導火線になったことが警察の調査で明らかになった」（聯合ニュース〇八・一・一五）

韓国メディアによれば、警察はこの大火災は人災によるものと断定した。

しかし、この韓国内の報道と警察の調査見解を見る限り、そこには事件性を疑わせるようなものはまったく見られない。それならわが国では、何ゆえ意図的に重大ニュースを伝えることを途中で止めたのか。不思議でならない。反って疑念は深まるばかりである。

被害者四〇人の中には多くの韓国系中国人労働者が含まれていたことも明らかになった。中国の温家宝首相が直ちに韓国政府に対して、事故原因の究明と被害者に対する十分な補償を求めた。

実は昨年一二月、私は国際老人福利交流文化祭シンポジウムにパネリストとして招かれ、韓国東海岸の東草(ソク・チヨ)市を訪れたが、その途上ソウルから東草へ向かう高速道路上から利川市街を遠望して韓国人通訳にこの事件について尋ねたところ、大爆発事故があったことは当然承知していた。このように「事件」は、その発生直後から地元韓国においてセンセーショナルに報道され、インターネットでその概要を知ることができるため、ほとんどの国民がその大惨事を知っていたのである。

三、日本の報道姿勢に恣意的な思惑ありや？

問題はすでに述べたように日本国内におけるマス・メディアの対応と、その報道姿勢のあり方に関わることである。韓国国内でこれほど関心を持たれ、大多数の国民が知っている大惨事を、なぜ日本国内で中途半端に報道中止しなければならなかったのか。穿った見方ではあるが、そこに事故発生直後に中国政府が関わったことが、報道規制のような何らかの恣意的な要因を惹起させたのであろうか。

一衣帯水の日韓両国の間には、お互いに隣国のニュースを知りたいという素朴な願いがある。過去に不幸な歴史があったとはいえ、二〇〇二年に日韓サッカー・ワールドカップを共同開催して以来、以前に増して両国関係は強い絆で結ばれ、就中李明博大統領就任以降の日韓両国国民の歩み寄りが増しに強まっている。両国間においてあらゆる分野で友好関係が深まり、ともにIT産業の先進国として、かつては考えられなかったくらい緊密な信頼感とコミュニケーションが構築されている。これは両国の情報分野においても同じことが言える。

ところが、この事件に対する日韓両国の捉え方には、不幸にして大きな温度差が感じられる。韓国側にはこの大惨事を公表し、メディアに情報を流して事件性を暗示させるような不審な兆しはまったく見られない。一方、韓国の情報公開がオープンであるのに引き比べ、日本のメディアの間には、残念ながら頑なに「事件」を隠蔽しようとの報道姿勢が感じられる。

日本のメディアでは一旦ニュースを伝えておきながら、翌日からひた隠しに「事件」の報道と真相解明を封印し隠蔽している。新聞各紙にしたって隣国におけるこれだけ衝撃的な「事件」をただの一行も報道していないのである。「事件」に関わるニュースは、国内では共同通信社から配信されているにも関わらず、インターネットによる韓国の新聞各紙以外から入手することができないのだ。一体日本のメディアが事実を隠蔽しようとする、その意図と真意は何なのだろうか。そこには、日本で報道されては困る重大な秘密が隠されているように思えてならない。

四、「あってもない」と口合わせするメディア

もう少し事件発生当日の報道の経過を追ってみよう。

この事件が謎をはらんだ事件であると疑念を抱かせたのは、すでに記したように日本国内で「事件」発生とともに一月七日夜のテレビニュースで速報しておきながら、翌八日から国内の新聞、テレビを含むすべてのマス・メディアが、七日夜のニュースを境に「事件」報道をびたっと封印した疑問を抱かせるような報道経緯からである。一旦報道された死者四〇人の犠牲者を生んだ「大惨事」を、日本のマス・メディアは歩調を合わせて闇に葬ってしまったのである。そこには言論人としての見識も、真実を伝えるというジャーナリズム魂のかけらも見られない。その日以来今日まで「事件」は、日本国内の視聴者の目に触れることはなくなった。彼らは、「謎深い事件」を闇へ葬ることにお互いに「協力」し、「成功」したのである。敢えて言えば、善良な国民はしたたかなマス・メディアに嵌められたのである。

もう一度確認しておこう。大勢の死者を出した冷凍倉庫爆発大惨事は間違いなく発生した。この事実は韓国マス・メディアが写真入りではつきり証明してくれている（朝鮮日報HP写真参照）。私も日本のテレビとインターネットを通してこの目で確かにそのニュースを見た。それにも関わらず、すぐさま報道は差し止められた。だが、一時的とはいえ、理由なくしてテレビ局が眉唾付きではあるが証拠充分の「虚報」？を流すはずがない。一方、新聞各紙は当初から「事件」を一切記事として取り上げず、「事件」は最初からなかったという「メディア見解」に統一したものと思われる。

これでは日米安保条約改定時に日本政府が米軍による国内への核持ち込みを秘かに容認した密約事件に関して、日米政府間に「密約」があった事実が公になり、世間から非難されても『ないものはない』ことは歴代の首相が一貫して申し上げている」と高圧的に言い張る日本政府の言い分とまったく同じロジックではないのか。

私の「正論」に対して、先日ある知人のジャーナリストから、日本政府外交筋にとって触れられたくない政治的、または社会的問題を孕んだ「事件」の可能性もあるから、あまり深入りしない方がよいとまで忠告されてしまったのである。日本国内の報道姿勢とその伝え方、そして報道に関わるジャーナリストの神経は、とても尋常ではない。誰かがこの事件の真相と隠蔽せざるを得なくなった秘密を知っているに違いない。

五、日本では誰も知らない。

昨年一二月、若きジャーナリストに指針を示し、ジャーナリズムの手本と評価されるほど、今も影響力を与えている名著、「ジャーナリズムの思想」ジャーナリズムの可能性（いざれも岩波新書）を著した八三歳の高齢ジャーナリスト、元共同通信編集主幹・原寿雄氏が講師となり、岩波書店主催によるジャーナリズム講座が開かれた。受講者のほとんどが正義感溢れる原氏の名声に憧れ、その警戒に接しようとして出席したジャーナリストだった。私はこの席でこの「事件」に対するマス・メディアの不可解な行動と対応について不躰に質問した。しかし、残念なことにその原氏にしてこの「事件」をご存知ではなかったのである。そればかりか、三〇人を超えて居並ぶ大手新聞記者の中にも、残念ながらこの「事件」を知る者はただの一人もいなかった。

ことほど左様に一般国民が知る前に、情報の洪水の中にいるマス・メディアにしてこの有様なのである。この事実は目鼻の利かなくなつた彼らの怠慢以外の何者でもない。彼らのせいで、私を含むごく一部の者を除いて、この「大事件」をほとんどの国民が知らなかつたといふことになる。つまり国民の一部の人間しか真実を知らず、他方で何らかの恣意的な差配により、真実が隠蔽され国民が虚報により懐柔されるという実態は、あまりにも危険ではないか。

インターネットが普及して、今や世界中のニュースを入手することはいとも容易い時代になつた。そんな時代にあつて、われわれが知りたい情報を手にすることができないこと、しかもそれがある種の組織により恣意的に操作されているとしたら、それは実に恐ろしいことである。

六、戦時中の報道管制に等しい隠蔽事件

この「事件」をもみ消した人物とこれを知るごく一握りの人間の中で、実際に陰で糸を引いているのは一体誰なのかを考えると空恐ろしい気がした。

これは戦時中の大政翼賛体制下で一億全国民に対して行われた情報操作や報道管制と本質的には何ら異なるものではない。わが国が民主化の成熟度を高めるにつれて、言論の自由は一層拡大され、自由にものを言える時代になつた。一部の非民主国家に比べて、どれだけわが国が言論の自由を謳歌しているかは言うまでもない。だが、下手をすると「事件」に関わる一連の暗躍的行為が、こういう現状と期待を根本的に覆すことにつながりかねないのである。

このような大惨事が現実起こつていながら、「天の声」により事実を隠蔽するような忌まわしい「事件」が、これからも周囲に起きるようでは、国民は安心して生活することができない。隠された事実を暴き国民が感じている不安を払拭するための役割と責任を課せられているのは、ジャーナリストの宿命とも言える。それにも関わらず、現代社会の発展を阻害する要因と闘い、真実を発掘・探求する情報を得ようとのひたむきな努力もせず、知り得た真実を世に伝えるジャーナリストとしてのプライドと高い志を忘れたジャーナリストは、最早ジャーナリストに値しないし、ジャーナリストとしての資格はない。彼らの権威への迎合と自堕落な生活希求が、国民の日常生活を徐々に蝕んでいることを謙虚に反省すべきなのである。

時あたかもマス・メディアは、その存在自体が経営的に危機に瀕している。ジャーナリストとしての矜持を失い、安穩に墮しているような非ジャーナリズム化への傾斜とマス・メディア内部の自壊作用が、その大きな原因のひとつでもあることをマス・メディアは謙虚に反省すべきである。報道の自由を護り、ジャーナリズムの健全な発展のために、また彼ら自身の奮起を促す意味でも、マス・メディア自らが自らの手でこの魔界の闇を解明して欲しい。

さもなければ、マス・メディアにとって、早晚マス・メディア自体が消え去ることしか道はないであろう。